

妊娠と出産を通じて、これまでに以上に食べる物を意識するようになった。私の食べたものが子どもたちの体に直接入っていくのだから、子どもには安心して食べるものを食べさせたい。母親としての自然な思いだろう。何といても、一番安心できるのは自分で作ったもの。次に安心できるのは知っている人が作ったもの。そう考えると、農業を選んでよかった。農村に住んでよかった。あらためてそう思う。

いい母乳をたくさん出すためには、季節の野菜をたっぷり入れたみそ汁とごはんを食べていれば十分なのだろう。「子供の分も」とやたらと栄養価の高い食事をとる必要もなければ、牛乳をがぶ飲みする必要もない。しかし、「泣くとは母乳が足らんとじゃなかと？」と周囲に言われて粉ミルクを足しているお母さんが多いとか。かくいう私も、双子を母乳だけで育てることに多少なりとも不安を

南阿蘇

大津 愛梨

里の風

米作りが守るもの

もっていた。そんなとき、「おっぱいは二つあるんだから、双子までは当たり前。母乳だけで大丈夫よ」と助産院で励まされ、粉ミルクを足すのをやめた。和食だけの生活を続けていると、体調がとて

もいい。世界中で日本の食文化が見直されているのもうなずける。一昨年、「食料の安全問題」をテーマにした国際会議に出席した。遺伝子組み替え作物や農産物の輸入自由化といったさまざまな



絵・有働 孝昭

問題について、各国の代表者と議論した。「日本は関税をかけて国産の米を守りすぎだ」と批判を受けた時のこと。日本の参加者はお茶を濁すような言い訳を始めた。歯がゆくなってきたので「私は農業者です。日本の米作りは文化です。米だけを守っているのではなく、国土や文化も守っているのです」と思い切ったんかを切ってみました。すると「そうか、それならうなずける」とあっさり納得されたのだ。拍子抜けするほどだった。実際はそこまで大それた気持ちで日々の作業をしているわけではない。とはいえ、農業をすること、阿蘇の美しい田園風景や農村文化が維持されていることは事実である。

米作りの準備もいよいよ本格化。わが子にも食べさせることを考えると、今年の米作りにはこれまで以上に気合いが入りそう。おいしいお米がたくさんできますように！(おあしす米生産者、NPO九州バイオフォーラム理事長)

※次週から四人の筆者は交代します。